OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	巻頭言 ： 第14号の発刊に寄せて
Author(s)	湯川, 笑子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2018, 14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72143
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻頭言
第14号の発刊に寄せて

『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』第14号をお届けします。2017年度のMHB研究大会は、インターナショナルスクールの教育を取り上げました。中でもよく知られており、日本でも認定校を増やそうということで話題になった国際バカロレアの教育内容に特化し、「国際バカロレアの求める言語力とは」というテーマを掲げて開催しました。このテーマに関して、1日目には国際バカロレアで教えていらっしゃる先生およびコーディネータの計4名の方から、実践に基づいた具体的なお話を聞くことができました。また、2日目には、長年国際バカロレア校の日本での運営に携わってこられた大迫弘和氏に基調講演をしていただきました。

本紀要には、まず、2017年度大会のテーマに即して、大会実行委員長の小澤伊久美氏に、「国際バカロレアの求める言語力」について、今回の企画の背景と趣旨をまとめていただきました。続いて、基調講演者である大迫弘和氏と小澤氏による対談（「国際バカロレアにおける「言語」と「指導」― 全ての教師は言語の教師である」）を掲載いたしました。この二つの論考を通じて、国際バカロレアが求める言語力とは何かについての理解が深まれば幸いです。

一般投稿論文として、本号には、研究論文3本、研究ノートを1件採択いたしました。研究論文では、まず、池田香菜子氏による「JSL中学生の多義動詞の意味・用法の知識と教科書におけるインプットの関係性― BCCWJ「中納言」を用いて―」を掲載しました。これは、中学校に通うL2日本語学習者にとっての多義動詞の理解と、教科書からのインプットの関係を、詳細なデータをもとに突き合わせて検討した論考です。母語話者が気にも留めずに使用する動詞がいかに多義を持ち、それが学校種や教科によってどう異なるかの具体事例が示されており、実際にL2日本語学習者を指導する教員にとって貴重な情報となっています。

佐野愛子氏・増谷梓氏・阿部ゆかり氏の共著論文（「ろう児の日本語作文指導における日本手話の活用」）はろう児が母語である日本手話での議論をプレライティング活動として行うことが、いかにその後のL2日本語作文に有効であるかを示した論考です。L2でのアウトプットの前に行う活動がL1での活動である場合、様々な要因によって影響の度合いは異なることが知られているものの、そ

れが手話と書記日本語との組み合わせである研究は少なく、貴重な報告であると言えます。

田中瑞穂氏・佐野愛子氏の「日本手話話者の支援を活用した聴母によるろう児への絵本読み活動とその効果」は、９か月という長期間にわたる幼児の絵本の読み聞かせ実践の効果についての検証です。これは単に大人が幼児に絵本を読み聞かせたということのみの実践ではなく、手話を学びつつある健聴者の母親が、手話での読み聞かせ方についてろう者より手話の指導を受けつつ、我が子に絵本を読み聞かせた実践です。時とともに母子ともに言葉が増えていくことや視線共有の頻度が高まっていく成果の高さに加え、非常に現実的なろう児の子育ての方法として勇気を与えてくれる情報となっています。

最後に、研究ノートとして韓嘉雯氏の「中国人留学生を対象とした読解活動を支えるアクティブ・ラーニング ―トランス・ランゲージングと批判的思考に焦点を当てて―」を掲載しました。４名のＬ２日本語話者が日本語での批判的議論をどのように実現していくかについて記述した萌芽的研究です。

巻末には、例年通り、活動報告、SIG（部会）情報、入会規定、紀要第15号への投稿規定などの情報も記載しております。MHB ウェブページ情報と合わせてご利用下さい。紀要14号の発刊に際し、ご投稿下さった方、査読、編集に多大な労力をささげて下さった方、その他関係者の皆様に感謝いたします。

母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会会長
湯川 笑子
2018年3月